



朝鮮物語

下巻

U 5  
1568  
3





何門  
號 1568  
卷 1



朝鮮物語卷之下

大河内茂左衛門尉源朝臣秀元記

慶長三年戊辰正月二日子の刻計小門外の坂下小物音出小聞也大河  
内茂左衛門尉諸傍輩小向て扱小事矣油筋の内小如何成表裏  
乃術を廻まき子知也定て敵忍寄けりて其思(我潜小出て  
探り聞登)若才大軍近く馳寄て入難き小於て其首を  
呼ぶ必滞りを開く其一人を捨殺し堅固小防と堅  
約小門外小出城坂下り同小岡本越後者一人の聲小静小出  
城内小云大河内是本宿小て云と云越後者各小あ三人申

月洋物語

卷之六

十一

依田氏藏





夜子細有るまねりと答也大河内それを問て是まで乗より  
 給へとて田中九津見をも呼出に三人車の松子を向ふ誠後云  
 ける我不肖の身也といとも異國本朝の通使と成て心坂を  
 申極ると云事大明高麗日本三國小其隠あり難し情是を案  
 まるふ武士たるもの徳小渺ん有きとを悦の思ひ亦余  
 受けふ小不思議の評定を聞ぬ其此頃大明小住して騎士千  
 の將とある其恩を計ふ少りも高く海ありも深し骨と粉小  
 一身をひいびいほよして報ざるも足は侍用樂昌國ハ  
 旧恩を懐て新怨を忘る燕を伐んるを欲て後爰小城内を  
 なるも清心の心旗あり我一度小不審を蒙りて遠國小奔

まる身よりといとも君臣より義忘るる次小某偽るるの悪  
 名を交るも無念なり故小後難と願に忠節申しては明白の心會  
 盟必山出有るべし其故大國傷りを好むといとも兵小詭道  
 ありまばお王の計ふ八十騎の中めて大力の者を技勝り會盟の壇  
 上小三人の大將を先と一悉く生捕る魯桓の例小住まべしと議  
 るの間必山出有るべしと寔小二心を多しを告りり家大河内三大  
 將の形小行て此由を申けまば三將を打て扱も大きある保れと  
 驚きり飛驒も一吉返を小日敷及門外小あめて登城有といとも  
 終小對面小能び殊更今夕の注進きりしては比類るれ更言語小  
 述難し只今富貴の厚恩を願て君臣の義をもちり士の道を立



らう事神妙の至感どうも堪へり城内のこれ忠信よあはれ日本  
 大王の忠節より唯今太口馬の褒美より及ぶれども隠密の事  
 おまは持参も如何と延引を以て主計頭幕下候立去後切替  
 知れる所其方の妻子を熊本の二の丸に籠て堅固小雷を付置  
 且若美よつも以て城運を閉き帰朝の身と成り角の忠節早と上  
 達まへ又以て嫡子を則後も受領一本知千石を三子石不  
 加増跡を継む一女子を人主計改ら娘と一然又き方姫は一若此  
 趣主計改同心せさふお授てる公方言上奉り嫡子の上出候  
 女子八某が居城豊州回梓呼びて予が娘と成り日本國中大小の  
 神祇の哥と誓て偽更よ有らるる候と褒美と思ひ詰とあり

と大河内承りて細々と流れて越後を是と聞て頼山陽を流  
 一おのり物をも云得がかり一が流れて流涙を押しつける  
 州へ流り角人と成て此戰場へ来るといとも吉御下捨置妻子お  
 事を忘る隙を以て淡山海美里を流るれば吹来る風の便も  
 一生死の有松急や有角やあまふと日夜朝暮心を尽  
 せおの悲夢を夢の外小相見事も叶ふ事小相見事存て在  
 一吉公此有難き山阿弥海も須弥山とも傍り上なき松の  
 心を清心との心情を以て彼等今まで存書夜の戦謀と成る妻  
 子も仍未まで承り事よ裁量よも成る然るべき松の根成偏小  
 頼も奉るとしてと合せると置此上の若も此の漏



陣(車裂の大難と云とも執望るり向後沙目(掛る)と云  
法と共(小陣)を帰(り)けふ

正月三日辰の刻(方)王の大使と(し)て是(日)果(國)人と(覺)し(き)城(下)あ  
来(て)指(麾)を以(て)城(を)招(く)田(中)小(島)尉(大)河(内)茂(左)衛(尉)九(津)見(兵)  
藏(出)合(如)小(島)方(王)の大使(り)午(の)刻(も)漸(る)ま(は)用(意)有(り)出  
出(城)し(て)本(途)下(り)於(て)對(面)を(過)ぎ(儀)を(為)し(て)と(り)大(河)内(清)  
聞(一)城(下)入(る)三(大)將(將)披露(を)飛(彈)も(返)答(不)合(對)面(の)堅(約)尤  
偽(り)不(非)と(し)ども此(二)三(日)攻(を)ゆ(る)所(も)得(ば)軍(兵)競(と)拔(し)  
風(を)引(き)悉(く)病(小)臥(其)上(方)人(の)大(將)も(氣)勞(小)病(り)終(一)人(出(て)  
對(面)も(あ)り(不)合(對)面(少(く)相(近)ら(る)べ(し)と(り)使(用)せ(る)ひ(く)と(り)王

大(小)腹(立)一(此)間(の)攻(を)盜(り)と(云)ま(は)早(鐘)を(頻)小(撞)惣(軍)色(を)  
お(後)て(太)鼓(を)せ(免)標(を)立(て)一(多)くの(軍)中(小)判(官)將(軍)團(扇)を  
立(て)軍(士)を(進)め(一)軍(城)を(巻)て(左)右(の)合(を)ま(と)り(等)く(操)ふ(を)ん  
攻(上)ふ(城)内(も)爰(を)先(途)と(防)れ(ば)一(軍)攻(入)事(を)得(る)本(陣)一  
引(退)ば(一)軍(攻)り(不)攻(め)ハ(引)ひ(き)て(る)攻(め)夜(の)法(の)ひ(も)あ(く)甚  
手(を)入(替)へ(て)一(息)も(継)ぎ(三)日(の)午(の)刻(と)五(日)の(末)の(刻)の(後)ま  
て(操)ふ(を)ん(と)ぞ(ほ)り(け)り(大)軍(の)矢(呼)時(の)聲(ハ)響(を)欺(き)戦(の)  
劔(戟)の(光)ハ(晴)光(の)星(と)り(も)多(く)映(炮)の(煙)馬(不)あり(ハ)黑(雲)の(如)く  
雲(珠)卷(奉)て(白)貝(成)隔(離)一(熱)軍(の)旗(旗)天(と)操(め)戈(矛)平(地)上(竹)  
葦(を)生(し)矢(志)り(兩)脚(より)も(繁)う(り)は(至)角(用)て(五)日(の)宵(の)間(乃



月西山小隠るまで敵をくばりりか城内も定て敵を攻め  
 ろりんと云々小子の初初の事あるに大敵聲をも立て攻寄石  
 垣半登り同き小時をあら矢を射込大筒石火矢を打ちけ攻寄  
 る味方早く取合突落し倒れ敵も味方も互小勇力を奮て火  
 水も成るぞ戦り大軍の奔の内なる蔚山の働ま大地震よりも  
 鞍し龍兵代る味方か一鎗を突引降もふ腕の力も覺て  
 流る熱珠の汗も甲冑もやままり三時計の夜の明る三年と送  
 ふより遅うりけ至漸篠目の空も明方小あり々々敵の大將を  
 鼓の小知小従て攻寄の勢も悉く養わら引れ六六六七六六  
 備を立て引れり花兵是を見て早降と云き大鼓をせめ追

時三夜揚々きバ切てあるとん備を志す千鳥小立跡を  
 へ先も立用心の神小見一六籠兵一同小何を限り小防ぎ来  
 足の時時志や切て出討死し現世の隙を明あんとて大の門を  
 押開く如ふ一吉幸長馳出門のち小立塞り鎗長刀を横あひを  
 引敵るるに物小狂る各と以の外小急て門の扉を押そ自決死  
 をぞおれし系兵兵是れりて塙の内走りの板小立上りきり  
 のひ果るの巡見まふ小誠小引入と見そ流石異國の武者をひ  
 花やうさりの事どもあり角て六日の早天陸の押拾万珍殿  
 して退所を大將軍秀詮公一陣小進ませ給ふ加藤左馬介毛利  
 を及も罷出で申けるは直の先陣と有事勿終ふき内まあり



お人よ山先子仰付しはと一言上を秀詮公仰付し予渡海を  
 としども釜山海の城代お仰付らるに依て何の志ももる無  
 念の人小暮しり此表の追討願書の幸ふり汝等が働は疎し  
 ぐは菟角今日の戦場予らんに任し一人も先出登るべと望  
 仰付し十騎の備の中一文字小乗入給ふ使高乃黒母衣  
 二騎尉山の麓下さる城内の三将を初め軍士誠お懸てこそ  
 難き大軍の敵を清て恙なく城と持まきしめると云事天下  
 小治るる名譽とて一今將軍追討るるあ龍兵足手の力弱  
 めるん小一人もおまきし門を堅く打て塀の上より眠り覺しに  
 見物とて一と仰下さる又其次小笠和泉守幅文の小性母衣

二騎越て山麓城の山苦勞中居し難し只今大將軍公法供し奉る  
 中見物とて云渡し使急ぎ軍中一騎仍ける城内の勇兵八塀の  
 上小なり敵の武者はあひ味方の追討を見物とてを居しりる  
 天竺震旦ハハハハハハ日本開闢より以来未だあふ事を見物とて  
 経るりける筑城より然るり秀詮公敵十方騎々其中を八方小乗  
 遠一十文字小乗破て備前兼光波おきと云い獨物を扱持し  
 討諸手切嘴ぐとて小くくる馬の尻平首畜る成幸十三騎の自  
 身小く小のち給ふた馬介き波守和泉守を先とて毛利孝忠  
 吉島津又七郎秋月三郎高橋九郎相良左兵衛佐押はきせり  
 山働を見り命を惜まぬ馳令大子敵を討ぬぬ多小須知



出羽と云勇士あり丹波國須知の城主あり一が羽柴少將秀久  
卿丹波の國主と成給へりより古郡を去てまき成り仕毛刺と名  
尉と名乗て此戰場へ来り一が左馬介教書を切きて歩仍立ふ成  
て危を見て毛利馳来り左馬介に向ひ一教を四方小追散一急  
ぎ馬より飛下りて左馬介をのき棄て我々又乘替小打來て十方  
一眸を賦て首級あまし討ちける敵大不利を失ひ敗せしを味方  
弥勝小桑五六町が其間遠をゆきを討散を敵大軍を負をも  
必死弱き友をも圍得て一て廣き枯野の萩原(乱入せ)大將軍  
涉馬駿を立ちし鐘鼓の山下を以て追ひ軍兵を止め勝時を上  
らせ和泉守ある介き成をもて宣ひしるる此萩原東西(長く

南北廣く茂るるれば大敵必伏を置し味方小勢にて勝し桑一  
長追一若不覺仕出さば今朝の働空るる一と思て棄止るる  
秀詮が和分別子似りや如何やと宣ふ三人水り此夜初子の涉  
陣小の自身先陣の山下知を以ていのかくの味手柄舌頭小を難く  
存奉る如小只今馬印を止させしれい涉子立大相國公山下知小  
未三つはも勝りいと恐るる感一奉の旨言上を秀詮公は満悦の  
以機嫌して今日の高名實檢一注し小記一と仰て見和泉守穿  
鑿とて遂に右等賀古々茶目深ふを記する言上高麗國義  
川河原合戦慶長三年(成)正月六日辰の刻高名日記

大將軍秀詮公涉高名首級



御家老

五百十 杉原下野守 五百三十五 加藤左馬介 三百三十一 笈和泉守

千五十一 毛利壹岐守 五百三十一 毛利豊前守 四百一十 相良左兵衛佐

七百三十八 島津冬郎 六百三十一 秋月三郎 六百 高橋九郎

都合一萬三千二百三十八 奉行在判

味方の内討死 二千八百餘也

秀詮公其表の棟神降小出紀有て言上遊一けるが由候若く各  
味方備上二万八千餘の勢を以て十萬騎の敵を遣ひ角大野  
得るに至事日本の吉事云以満足のありあり大敵四冬より飢勞  
まくる故若干の軍勢を討て引入ぬと候仰る角々和泉守也

家老下野さふ内て云々今乃大將軍公具足初の合戦三國無双  
の法下知を以て討て首級を鼻をうきぬればとて此草深き淵  
へ捨て置き小非を釜山海の大津一か一山城に掛置敷人小は  
一と候云々斯りけるを小備前美也も國主浮田中納言周防  
國主毛利宰相阿波國主峰須賀阿波も潜岐國主生駒雅樂頭同  
様波もも及國主松浦肥前も土佐國主長曾我部土佐も薩摩國主  
島津兵庫頭錫島信濃も小寺甲斐も藤堂佐渡も中川修理も  
等と初て其外各軍散して我川原の戦場ふ来り芝居法を以て移  
承中野も心内手柄の訴申上る秀詮公由覽有ていふ汝等過分  
の國郡を下しとてハ沙用立らるるを以て此前代末聞



の龍城を削るが其方等入馬を立越ひて後法も加勢を成  
 せし十二月廿五六日の比り面々棄けけりしや九山の湊を  
 仰ぐ何の者か又各我を過る此表弓杖小まぐり出で大敵  
 若も取て返一この日の合戦は結事あはれ何働ぎの所存を  
 やとち小命を捨つ諸大將定み誤けまは返答をも申上侍  
 を頭と地は多居ゆりける諸軍勢を聞き相お互扶の  
 大将式へまゝ十七歳ふこそ成せ終つ働の大やぎ河のゆゝさ  
 よと上下耳目を終る一宗其より秀詮公丸山に備をへらる  
 又黒帽二騎蔚山の城下を龍城の体をも重く感あされ西生  
 満ふあり一主計は軍兵を早に蔚山へ替へ龍士を西生満

の城へ移しき人小五人並の扶持を帰朝小まきてきいあは  
 ぬの苦勞休息させ一又四冬廿二日より今日あまふまで其間  
 十四日米水を絶て日々の大勇洋小記一飛驒を一判を以て言上仕  
 づき旨仰りし三大将は清申上あ使はゆりける然るも明州の天軍  
 悉く退るなりとこの城内も曾て油取せは山谷の間より又  
 敵出る事有りとて上下をのまり返り居りしに海上敷  
 千乗はづる兵船ども我先あし押入城中より星を見えり  
 らはと合図の早澄を責らまはせしを聞清皆く波上ふゆけ  
 るが諸人餘り小堪るにて舟を濠に押はる申の刻計は蔚山へ  
 馳より知も走らばるも龍兵餓鬼の振成をよめて胃のそ反



指戴き切も浦山を龍城我々今夜中の攻の内石大矢大筒  
 八陽さくも打出給ひるなり三の丸の堀の上ある二間餘の大松  
 明透間なく指さし終る事此大籠の龍味より比頼るは山更ハ  
 移る長松明の光もて城のまはる白雲小異る一三本丸を雲  
 小色中とある松小見一が攻せむる夜毎小此城五間七間舞  
 上り一八途重井小高く成て打出小筒重雲中小固く身  
 の毛もとらけりりと落籠兵を聞て肝をけ一云けふハ  
 堀裏うらる軍兵ささるる松明ふと出る事覚悟も及ば  
 鉄炮ハも業も後果筒を存ふ事との力ふ一其證按小筒も  
 近所小あるうへん又松明の燃跡もさる一と答ふは諸人をも

打て第一大君の山聖運天地よりも厚く深き故小日本の九万八千軍  
 神槍籠て悉も義をも勇士小力を合給ひ一と見たり誰う所  
 為とも知ざしと如此不思議ある神助の程をあり難くも傳  
 日魯陽の為小三舎を退き巖貳師う為小飛泉と出まも滅威  
 一と奇異の思ひを成しりける三大将加藤左馬介舟大将の  
 三上六之丞を呼く其品具小聞飛陣ち一吉云々ふも惣トて海  
 以来の軍中人業小非むと覚あり殊更此城の柝を棄てる小全  
 人間の働而小非む敵より打一大筒石火大弓小雨よりも繁  
 り一に城内一人も中々死さると云物ふ一其上此神秘偏小秀  
 吉公積善の由慈悲より出る事と覚ゆ夫をいり小と云小日本

明洋物語



國中くわにちの神社しんじや佛ぶつ岡おか大社おほやしろ小社こやしろ小陽こひかり於お二百年にひゃくねん三百年さんひゃくねん朽果くわく多たと所ところ  
 この日記にちぎと云いく悉しつく造營ぞうえい仍なほ付つく是こゝ戎えい古名こな將しやう我死わがしの回跡まがと若わ絶つ  
 むとと改め棄すままととと継つせ其外そのほか比ひ敵出てきでの亡所むしやうと成なと改めあらたふふ  
 ろくく都鄙とひ遠境えんきやうの万民ばんみん賤せん山さん法ほふ路ろ道どう山林さんりんの香か員いん人にんふふふふままてて普あまね  
 汲世安堵とくせあんどうの汚よご惠めぐみ熱ねつ天てん熱ねつ海かい小満せうまんて誠まこと小日月せうにげつの草木そうぼくと照て降くだ雨あめの  
 國土こくどと潤うるままが如ごとく故ゆ小神佛せうしんぶつの威力ゐりきも強つよくて神風かみかぜああくく小大軍せうたいぐん  
 の圍とり人ひとと吹破ふきやぶりつ籠かごの籠兵かごへい枯木かぼ小池せうちの咲さくくとやらんの危き運うんと剛ごう  
 き一い率そつのありあり程ほどささととををええれれるる  
一本此間小畑内を見まはし堀裏小建を旗  
 竿指し矢槍を拾ち付まはるる旗  
 村解ゆる矢の音は若くは矢を以て音とてかゝりしと云あり  
 去程きよほど小主計頭清正せうせい居い  
 城西せいせい生海せいかいの軍兵ぐんへい加藤かとう右馬みぎうま允いん祐ゆう一い加藤かとう百介ひやくけ生林せいりん隼人すんにん佐森さもり

本儀ほんぎ大夫たいふ急いそぎぎままてて尉山ゑいざん城じやう小入替せうにりか飛驒ひでた一い吉きち先達せんたつて出陣しゅつじんも二番にばん左さ  
 京大夫きやうたいふ幸長きやうちやう三番主さんばんしゅ計頭清正けいとうせいせい城じやうをを出でるる代しろりの軍士ぐんし旗指はたさし拍は何なにもも花はなや  
 くに城じやう一い飾しやくり水兵みづへい粮りやう玉たま系けい新監しんかん曾鍋そなべ釜かまをを小せう玉たままでまで城内じやうじやうへへ入いけけままバ  
 三大將さんさいしやうを初はつて籠かご士し正月しんげつ六日ろくにちの夜よ小入せうにり舟ふね小乗せうじやうり蘇生そせいししるる心こゝろ地ぢして  
 物具ぶつぐを脱だつととひとひとく腰こしへへ己おのれひひししをを拔ひてて立居たちゐもも十じゆ八はちはは押陣おしぢんの時とき前まへ  
 以も諸人しよじんも本時ほんときとと終つひ小眼せうがんを合あははるるにに増まてて四よをを廿二日にじふにちより今いま六日むろくにち小  
 玉たまてて曾そてて眸まゆを交まじじるる水みづ小渴せうかつ一い食く小飢せうき寸すんの涼すずふふく身骨みほねををく  
 だきて働はたらりりとと早はや多たいいふふかか眠ねりり一い六む大軍たいぐんの攻せをを着あひひ見みてて刀  
 の柄つら小せう子こを掛かぐぐののとと起おききてて目め然ぜん覺かくを籠兵かごへい上かみ下しもに限かぎりり度た少すくままととら  
 む其あそのあひひは大攻たいこうの夢ゆめと見みるる事こと三年さんねん除よめりり八や止とりりりり爰こゝ小大



河内が舟の形五郎在傍門と云ふか九湯を中椀三杯あてて後  
一度も何と云ひりしが大河内が高きを以て粥を呉よと責むると  
云ども十胃が間飢ある事なき其相を鑿て粥を与りけるを以  
の外小憎しと思ひ只ち高き切殺し食更をふまに任まざると  
思ひ腰立は頻小呼々を五郎が身出で大河内が面色を見うけ  
間遠小在る云ふ氣色を見奉るに手討小成ぬき神小  
活腹立ち尤も極小て得共先思案と承り最代末岡為る  
ふき大敵の中の龍城連も命ありき小あづけぬ小死一生  
の命令と拾せ給ふ更津小優曇華と存此上も甚き風を  
いとひ能く養育しなむと存せしに五百日間絶粒と思

召食子山小任せ給ふ忽小命令八条ト大事の命令を空く申  
ふて捨さ給へん事且八比奥小今五三日の間々山城と思  
足私命限り五日の間八比意小但さ申すと洞を流して養ふ  
大河内は高理小法めさる詞も亦く只一討小と思し心も弱て  
恥しく現の如く伏小り去年七月七日小著初具其の表紐  
今夕恥申小てときかり用て大将の本舟を初て蔚山の地より  
三丁の間入海を隔て芦原島の洲先小掛り掛り小繫て夜を明  
る今日秀詮公義川原の山小供一大功を建一山慶美と  
て左文字の山腰物皆具の山馬加藤左馬介小下さる光忠の山腰  
物山算和泉延壽の山腰拍山馬毛利吉成山洋領山毛利吉



前島津又七郎秋月三郎高橋九郎相良佐右の五人の面も皆具の馬持願各面目身小餘りて登見一ふりふ

七日の早天三大将の本取を又蔚山の邊に押入加藤百助生林集人佐藤下儀吉史を登て城近辺敵の打死を記一と有し蔚山二三町内外まで討死しむ敵の死骸一万五千七百五十四人あり龍城まで飢寒に死する者八百九十六人あり我目録小記吉史より三大将軍士跡は成の刻計小西生海小津一で大労を体たる夜半の比蔚山の方小當て石火矢共大筒共壁を穿き大木本抱きおちたる小も非びして山崩大地おちり立城内町屋の戸障子も悉くけりあり又五更の曉ふむて大明人二騎馳来りまゝら我二人出陣の

刻より鉄炮の藥恰大山の如く預置ふ不思議の天火を以てを焼失志軍士も多く焼死され我等二人も弥火中に空く成との説を厭ふ因りま吉郎小残り一妻子が一命を延びき為小潜ふ爰一途電に命と懸を懸しとて降参ふ乃一吉聞て預報の幸なりとて清正幸長一使を以招き明人を召ても國の松林を尋明人曰今度も王加勢とて大軍を召具一ふく来り一甲斐多く蔚山の少城を攻落し得て刺若干の軍兵を殺し何の面目もて大明へ帰参き近所不在陣して一同蔚山を打潰しと議定し蔚山より三日路隔て滞在の如小思の外ふ天火を軍士數多死ける大國の不運なり三日路間の道も負死人の卧するを發



千万と云数を知んどもと語りなふ  
 諸大将西生海小集て評定しちふ抑分及蔚山の籠城小兵糧  
 を令事を得ん又大敵の圍を得る事先手の城と云るも餘  
 り小過多る故より同く蔚山順天を破捨て東西生海を以  
 て先手と一西生南海を以て先手とす然りとありはも各  
 尤と同一て連署の状を調言上せんとは太田飛彈守るるふハ  
 右の各城ハ回冬秀詮公仰小て立然も蔚山ハ某奉行と成る  
 申就せしめ城を破つて之とある事先秀詮公  
 を軽ん下なり下小奉行の者を蔑小しゆふ所存某々分別ハ  
 付し然とつとも物事多くの口上小任せて相極き上を去

年伏見を出船の刻に付しけは各存分の通言上ありとあり  
 竹中伊豆も毛利氏部大輔云るハ敵の城を味方が勢め味方の城を  
 敵より責る事ゆき小水又兵糧を入るきも前方知し  
 復あは是は城出過て兵糧入難き小水也若年の將軍公仰  
 付しと云ハ十万騎の勢を以責得しして少き籠兵本意を遂  
 一城を引入るきとの相決ハ各誤りしる右も城小對し何とも  
 如何成苦勞身小積り破り捨るの事許治ハありと然とけり  
 然もども諸大将免角言上然りと評議以爰小加藤左馬介  
 判を加む生駒雅樂隊毛利も政も加判せしと極進め  
 常れ左馬介答て各歴々連判の言上小某如き判形致は小



乃以そ等ては合は法大名一同小死彈敏主計敏少進を教人武者程  
 と頼む所小各免や角と云々事上の心為愚るる小似りりと云  
 一々左馬介諸小向て曰抑今度の蔚山籠城天竺震且小未  
 此例を聞む況や我朝小於てとや開闢以來の取事日本の武勇  
 を天が下に頭以事豈此城小依小非や且ハ一及ハカ一も先きの  
 城引退の事は是後希代の名城を破ると云々後世の朝鮮我  
 朝の飛躍と存む各の詞小乘一愚者推策下として上を計り忠  
 を汲小相仰りりといふとも殿下の心分むてハやその破捨と云々  
 上意あるらふと存るるれ左馬介小於てハ加判全く改まり  
 若各の心分は十分小叶一上も殿下の心分を蒙りまりといふ

事堂をきいて号を知り雖然某が存分ハ如此いして遂小加判せり  
 たり飛彈も右の趣意小付てハ亦仍中判るる蔚山主計以居城も事也  
 清正小判せは城の三十餘人連判一則其趣意細小書付言上小極る其  
 由秀詮三回各本小後立きて於る言々の名城引入き言上沙汰の限り  
 言語小即ちありといふも諸事多分の口上小極き言仰出さるる  
 色バ号を言上せはる更却る上意を替りに相仰りり急き言上次  
 應一さるる城近邊三十餘丁四面の山浜泥川の善不悪所を委  
 く繪圖小写一城内の案内告知る年告よれ士四五人言付水夫大  
 勢あて立返り風波の善悪を云ぶと渡海一早々上意の山返事帰志  
 す小松小申付べき由見和泉も熊谷内藏先小付付流重てあ人小



宣々々々自然其門も此の城破一と上意有予ハ蔚山不在城  
 一順天ハ山口玄蕃先を籠居一此仕合上意小背流人と成て九  
 原小尻を肆きといふとも日本ハ内朝覚悟不及と宣ハ山口玄蕃  
 先を召て汝順天一汲海一城ヨリ繪圖面を記一急ぎ内着ま一と仰  
 小依て清石の小雀丸と云舸小乗て豊原のさうのみお急小竹  
 島の城主鍋島信濃と天主小居ハ地見の士山口が馬駿を見より早  
 く兵船數十艘小兵具を入甲兵を業上使迎として出ハ其次リヤク  
 山の城まで送りヤク山より迎の兵船出て又コチヤクの城一送りセシ  
 城南海の城次第も小送て順天一着ハ玄蕃先繪圖を調一ま  
 城より送て釜山浦一乘厨坐ハ則七人の小舟中一と為付早と言上

有ける使者正月十五日の一天小朝鮮を業出ハ登取共小急程小  
 廿四伏見の法城一着府も則五奉行中披露の知小太閤殿下涉機  
 嫌斜るハ使者を召前一召出され籠居の品具も聞一召上とて大  
 悦せ給ハ江戸内大臣家康公江戸中の言秀忠卿加賀大納言利家  
 卿會津中納言景勝所池田三左衛門尉照政佐竹右京大夫義宣伊  
 達越前守正宗島津修理大夫義久等を初として在伏見の大小名  
 悉く登城一其品も聞て偏小公ハ武勇独天よりも廣大なる故也  
 と各感ハ奉る然不知小五等りの石田治部少輔三田常之進公ハ  
 差有小依て有とぬ智略を廻して後関白一品大政大臣秀次公を護  
 一事り失ひ奉て又秀詮公をも何と擧と邪心を挟之公の市前小於



て申上りて秀詮公の代りて海邊の事より若年より故に  
 出城追討遊ばはる軍危き次第に若大敵出て釜山海を攻  
 敵を城に日本通りの倭を塞ぎ諸勢難儀すると言上りけ  
 るに公も先實おもと思われける角て蔚山順天破る然るに  
 連判の言上を上覧かりての外急を給ひ抑此蔚山天下無双の  
 名城を三三餘人連判の者兵蔚山の二字を書て守りとま  
 申を由上意あり相成の繪圖を上覧かりては是圖依りて  
 小蔚山の城本丸より小方小丸より二三の丸を切て本丸の南  
 付も脇の石垣高十間小築上り小針形を成て二の丸三の丸門を  
 二ヶ所小入遠く立二二三本丸の惣取り臺本とははらひ長屋

と建廻り瓦をてめぐり城より北南の大溝指渡し横五丁  
 余ふ向の芦原を堀割り新地の舟入として日本舟の出入城乗  
 入板小丸一則善清を連判の者申付若少いても善清は  
 不甲斐るれ若八十人あても二十人少くも加番小丸一置り善清  
 出来せは秀詮を先として城主の外は皆帰朝致さる由上り  
 り其内大忠の面々の感激状を呈下されども  
 其方働于今不限天正十年五月備中國宋雲山城主松田左近將監を  
 討れ同十八年の六月武藏國八王寺の城一番乗仕依り豊後國臼杵  
 城付三万五子石津へ行下拾万石の代官の地を仰付其後  
 慶長二年七月高麗唐島表海上陸て固扇を去て諸軍を



その舟軍に得勝利若干の大船を焼破翌八月南原の城を  
番乗仕慶州判官貳万騎の大將を討死國中の働き致す命の合  
戦切勝十二月蔚山表の大敗軍殿後諸軍を助同廿四日本丸大  
手の門外に切首致九取雖為小身十六万騎の軍中第一勝致  
度無類に働法感不斜依其子亦以代友所に内四万石に如増ら  
成奉知三万五千石都合七万五千石内一万石無役残りの六万五千  
石軍及び仕に猶徳善院法野彈正少弼増田右衛門尉長束大  
藏大輔可申也

慶長三年 戌

正月廿六日 秀吉法朱印

右田丸彈也

其方更先年於江州柴田合戦の刻一高海を仕に付る為山優美  
以知仍一廉と云加増る其後於朝鮮數度番船を切死公以類  
手柄に依不可勝計に殊今夜順天蔚山を城に引入各連判仕  
以之不致加判神妙に覺悟は感不斜依其子亦以代官不有次第  
三万五千石高加増るに知六万二千石都合拾万石内を方石  
無役九万石軍及び仕に若國持に臆病者方者若國所に成猶  
又國主より作身公の氏に作命を全く仕りの致忠節に自然

其方更先年於江州柴田合戦の刻一高海を仕に付る為山優美  
以知仍一廉と云加増る其後於朝鮮數度番船を切死公以類  
手柄に依不可勝計に殊今夜順天蔚山を城に引入各連判仕  
以之不致加判神妙に覺悟は感不斜依其子亦以代官不有次第  
三万五千石高加増るに知六万二千石都合拾万石内を方石  
無役九万石軍及び仕に若國持に臆病者方者若國所に成猶  
又國主より作身公の氏に作命を全く仕りの致忠節に自然



乘調儀聊尔働石仕無城度指之令覚悟猶徳善院法皇  
正少弼増田右忠尉長東大花大輔可申也

慶長三年 戊戌

正月廿六日 秀吉法朱印

加藤九馬介

と感下れさるる見和泉島津又七郎少も感状由褒美と下  
され使者も黄金異服洋領一舟朱印の箱を請て則廿六日  
伏見と乗出してより道の湊ふらむと夜時を待て水主立代り堂夜共  
小急ぎられ二月二日酉の刻を州風本の湊小乗入船人を呼出

号ハ大事の由朱印舟る 對州渡海の日和必何と云舟人畏て日  
か一日和あての船の船頭是より由小高麗渡海の根子覚束を  
くらぐ舟の梶をよきと云使者是を聞て浦人より人々  
一と云一六右郎左衛門と云その舟小乗らるが此八幡山の嶽小篝  
を太く焼く一と云並て戌の刻計み朱出太郎左忠尉梶束を以て  
烽火を知り不圖承を走りれば更衣月の短夜も明ふれ順風を  
直艦小文て三日の夕暮小對州を倚の浦を五梶小見て乗過る宵  
の間の三月月も程あく西山より里給ハ暗き波上を枕として四十八  
里の海上を上意を重く走り形中の上下二夜一日のきよさかま  
弟後を忘トてひまゆ一五更の曉を舟一むささとも太郎左忠尉



終小眼を休け昼夜握束を握て油ひせば東方の横雲變き高  
 麗國の高山も不のふ見渡り上下力を得る陣小万里を隔る  
 敵國よりとつとも放溺よ着る地して程多四日午刻西生海小乗入  
 ける飛陣も本陣(中奉行集り封を開き洋見を秀詮公に覽  
 の為見和泉も釜山海へ持参せり角て中浦人を仰た東軍  
 召かし褒美として白銀三十五枚主計既左京大夫と重十枚は  
 ま浦人恩悅の眉をど開らふ

秀詮公朝鮮九の付城小城主を任付らる東の先手慶尚道  
 蔚山の城加藤主計頭同國西生海の城毛利壹岐も同國釜山海  
 城寺澤志摩も同國竹島の城鍋島信濃も同國リヤク山の城小

寺甲斐 後黒田筑 同國コチヤウの城立花左近大夫 後飛騨 忠清道河川乃

城島津兵庫隊同國南海の城宗討馬も西の先手同國順天の城小西

撰津也と定らる其外式十餘人の大小名六万二千余人の人数を以て上意

の如く蔚山城を付せし普清急ぎ由松原下野も山口玄蕃也と仰て

仰付も色りれば二月六日より五掛秀詮公加藤左馬介を召て其方此

度加判せざる事比類なき思召依りて人の奉行同蔚山普清の奉

仰付も色りれば二月六日より五掛秀詮公加藤左馬介を召て其方此

三月十三日小恙く書信出来も其の事切申す加藤左馬介此越大将軍

言上も色りれば二月六日より五掛秀詮公加藤左馬介を召て其方此



仕出さる故に諸大將の供の用意一旗指物を以て舟を飾り左の  
敵に向ふがく弓鎗長刀を押し立十六日小旗に城下釜山海表の  
海上小乗運る十七日の未明秀詮公の日本丸の大船五切籠小史を立  
て推出す諸將悉く押はき奉り出船を四月秀詮公大坂小治  
著船の屋形小入せ給ふ諸大將も残りん供して着岸次は使番の  
士と召て早伏見上り町中小山家徳士の宿札を打て一明五日あら必  
涉上洛とは信付五日早天大坂を出入り先子杉原下野も二備山口  
玄蕃元は旗手鉄炮槍を如く先子と涉奉陣其間二百餘丁を  
隔るは旗先足輕三百の旗奉行中瀬帯刀涉本陣の山先子坂崎出  
雲古鷹匠の面指加り旗本小は使番は近習の士供奉し山跡

備の大將松野主馬首行儀正一諸道具を括一静くと伏見一を  
給ふ都鄙遠境の旅人等小五まで幾千万の限りあく居並びて見  
抱も七人の山を以て初て初朝の大小名皆供奉し上りけ系  
大將軍公涉登城小依る内大臣家康公福島左衛門大夫正則卿加賀  
大納言利家卿同嫡子肥前青木紀伊守京極少将伊達信光會  
津中納言山形出羽守長岡越中守 後細川三斎 入道忠興 結城中納言秀康卿と  
始として近習外松の大小名残らぬ同公の祈小大相國公出涉大  
將軍一河對顔の河を掛ら七人の奉は左馬介苦勞供りしと  
上意あり太田飛騨守蔚山の城上意を以て直しし繪圖持来  
一上覧小入奉りけき三國無双の城あるらんと涉機埴石流して出



定ありたる八軍小勝て功を後世に伝へ古今の通例を如く況是を  
 秀吉治世の間小朝鮮の征伐せる希代の事あれは和漢と朝鮮末代  
 の名譽小可備と仰て日本の軍勢十六万騎が討つ朝鮮人の首  
 級十八万五千七百三十八大明人の首級二万九千十四都て二十二万四千  
 七百五十二平安城の東る大佛殿迄土中築籠石塔を立て貴  
 賤今小是を軍中の為終忠功の者の働ふと委細日記小書付て  
 諸寺諸社小奉納し給ふべきふんと沙汰し敢てんり公沙快き  
 る儀事と太田飛驒も謹言上仕る今及秀詮公多頼ふ居下  
 知の凶彩小より龍兵の運命も助り諸軍勢大小利を得る事也若  
 年と八申されむ古今無双の尊將也恐公の内聖勇ふ少くも遠

せ給ふべくんと申上る殿下上聞かて藤原石田三成分護言し奉  
 りし故上意有る大將軍の自ら矢を取と云事ふ此及秀  
 詮と名代として憑く深淵小隙を薄氷を履とやらん後悔小思  
 ありと有るまは上意の下より秀詮公宣ひける飛驒左馬介能  
 承と條の常の御名代と有は後治の所存も有る事と軍陣  
 のは名代ある故若輩よりとととも少清申渡海あり我共今  
 後悔の上意仕の者共數人の耳目も死しく生界の事も予不  
 覺かり於て八奉行の者共願ふ言上致し秀詮公首を刻らむは  
 悔の着りぬれ松小飛驒もたる介申上ると條返し内あり高く万  
 死の内氣色と見ても沙汰小憚もなく頻に宣ひ公御座を立と



たまひ沙家老の杉原下野吉山口玄蕃元小苦勞仕りしと云  
 を掛し是簾中一入らせ給ひけふ如小家康公秀詮は傍近く寄  
 給ひ相涼らまはしむるもの哉は尤も極まり侍父子縁の中何の  
 由子細之きと極く練給へ殿中何公の諸大名一同小譽あり  
 中石田治部少輔下野吉玄蕃元小近付て云らるは只今荒き返  
 参小依て公清機嫌ありし見させ給先は屋形は供ありき私  
 語り秀詮公風小聞名て只一討しと思百拜して腰物をおとり  
 立せ給ふ事小に家康公のきとありき治部少輔推参を申罷立  
 給しと云給らる相家康公秀詮の由を引き出城は屋形  
 小玉ては供らるは私給ふ事小大相國公上使としてカウグウスと

云文中来り上意の越申はきりぬる此及高麗の由効き將と云思  
 らし小只今の由効強と上はるは科息として越前國一國替と給  
 出され由申上られは秀詮公大さ小は腹立ぬて比丘尼の烟付する  
 事云と敬と念給ふカウグウス迷惑一上使の身あり得上意  
 の越を申上る事小私争ら給ひなるきと有られは秀詮公は科  
 息請一きは各を覺つて只頭を刻らる一命有へ限ハ國替は仕ま  
 由申上ると給仰ら小家康公カウグウスを引退給て秀詮公は悦  
 小思る由御前然る後仰上らる事と宣ふカウグウスは尤も去  
 そ之能くは異見ぬみ進せは沙取持の次第政所の内臺極く妻く  
 申上りしとて歸まり角之内府色と云異見一先誠ありは國と



宣公秀詮公等て内府へ給ひて内府餘りふ内府を拜し  
 給ふ事ハ秀詮公等て内府へ給ひて内府餘りふ内府を拜し  
 思ふ念せ給ふ事返答我命の限ハ誠並入國思ひもあつた  
 ひとども余りふ二ふあ異見し給ふ間さあらば路中殿中へ限  
 せ治部少輔めを見合次第討切其後分別せしむべきに放され  
 有る事ハ内府へ給ひて内府餘りふ内府を拜し  
 内後有て内府の士女ハ誠並指下し宿屋ふま給ふ下し先ハ大君  
 内腹いせの爲也と宣公秀詮公ハ隱密し外旅の士女ハ誠並下  
 し給ふ然るに家康公前田大納言利家ハ誘ひ給ふれども利家ハ  
 き不依て内府只一人見夜ふ不涉登城し給ふ大相國に給ふ

家康此程ハ殊の外ハ奉公給ひ奉りしりと宣公其言兼を種として  
 家康言上ハ曰秀詮公朝鮮ふその内勸内程ハ忠思百故内國替と給  
 出され仰願ふハ内國ハ内國國の馬給言申上後奉存り得共涉機  
 嫌を恐て申上得と宣公其より弥打給ふ事涉登城有  
 けま公ハ快と給ふ事ハ又事ハあがりりると仰家康公何と我秀詮  
 公内事を涉宛言申上度いれども涉機嫌何と申上得と計  
 ひてもの宣公ハ公内程悦の體中其方左程ハ思ひ給ふ家康  
 次第と仰出さる家康公涉前ふ感涙を袖小濡し内程悦有て  
 宣公難有上意を承りて殿中へ立早と秀詮公ハ屋形ハ  
 入給ひあ人の侍家先向て城前遣し給ふ内家人早速呼上せ内



國筑前下し終一と宣ひ叔秀詮公供ふて六月二日は登壇ありんふ  
 公清對面は機嫌能くして秀詮公朝鮮苦勞の回復美と仰せてタカキ  
 貞宗の涉太刀吉光の打刀大般若捨子の活壺ニワ涉茶道具鷹武  
 近山馬二之黄金千枚進せし家康公光思の活腰物判金三百枚下置れ  
 涉持舞松の四馳走めて南将を形一ゆせ給ふ秀詮公使番長時  
 豆ちをきて家康公をさるは伺ふ回今及ら持を本國一ゆは  
 其上色は懇みの時合を以終申下とを任入れり  
 七月上旬の比より大相國公何と云くは遠例と風國を諭し月度代  
 の威風廣大無迫ふして四海波静ふ納り揚柳の風枝をなすは梨花  
 乃雨塚を破らむとやらん春吉野醍醐の山花見夏四月の殿中み

明一暮一修ひ宇治川の河内秋々美濃尾張三河遠江の鷹野越  
 ばされ世ふおち人ふるは知れしとては出家後家人おのわびおのふ金  
 銀米錢をとりし路頭山林賤心下までも家屋賣下さまで普く  
 悲の涉惠四方不滿加りて日本國中悉く捨地仙舟らむ石積り小  
 極り如何成出家沙門海士は丘尼おもふ安く所務とふ一若く歳中を  
 願ふも實成は涉不例と聞て天下の笑止是るりと上下悲ふふと云  
 そのお一若程八月上旬夫一の法遺命ありては形見の色とを  
 諸大名へ下ささるる角で十五日の朝カワラウスをきては硯料紙を乞給  
 ひ法筆と添給ふ  
 一よく成さるるべき事 一おんをんゆをまのひ



- 一 大いにさるるのり
- 一 あきねるるのり
- 一 一人おちるるのり
- 一 一身のゆくまはるるのり
- 一 川よおちるるのり
- 一 敵よおちるるのり
- 一 内のおちるるのり
- 一 何れおちるるのり
- 一 何れおちるるのり

我身はゆきまらぬ

たぐひなくともゆきまらぬ

とぞおちりける去ばは猶目を遊ばたのりさか見しを給ふ天下の  
 名譽教をきて集りて岐伯黄帝の秘旨を業一河間丹溪の妙方

をきざりていふ事ども更小験もあままだ社社の奉幣寺との懸  
 祈月待日約星祭泰山府君までおふりまはる定業をば甲斐をか  
 淀松の御臺所申小乃殿中上下の女房達御力を失ひて  
 あゝ角を渡りて給ふんと案と頓折折中の丸の御主殿本村宗  
 蔭がまかりて戸柱敷居鴨居等折入の天上まで金具の高  
 蔭僧小く襖障子に居る人狩野長谷川を尋ねてててて  
 の人蔭二万も三万も教をたむかひ不思はるは是成見を血の涙の  
 里不思議とおひひ妻しく見まはる幾千万も悲く眼の際より類先  
 まで流るる濃もろき血の涙一同お付く有る者諸人足を見て  
 氣も魂も失果て泣あはる蔭ひ涙ふむせむ計あり十七日の辰の刻



公大野修理大夫早見甲斐守片桐東市正と西庵の法主殿(百三)れ  
 法盃をとりはる秀頼をもち立(き)由上意あり又法廟八束山の麓小  
 構(正)一位豊國大明神と願(奉)る金き肯仰らる小三人あり  
 悲涙を袖小濡し清和を羅立ふふ然るに此君天文五年(丙)申八  
 月十八日辰の刻に誕生あり(に)慶長三年(丙)戌葉落月十八日辰の刻  
 涉年六十三歳おくも楹の夢を醒る大名高家の恩澤小浴せし  
 そのいふ小及び天下の貴賤男女をさまでも考妣を喪するあり  
 猶越りりる唐堯殂落しむひ四海の音を止とわ其(上)吉の聖  
 帝(受)る末世の名將時隔り世異り(と)ども竹符命を合まふら  
 如るり有難りり(名)將あり今(の)際(の)以(辨)相傳(小)人(子)孫(ま)と(一)

り此蕙蘭を焔易く良玉に堅く(は)浮世(は)只(愛)の如(く)悦(ば)む  
 ぐぞやと(今)更(思)ひ(ま)さ(り)涉(ま)は(れ)あ(ま)し(一)石田治部少輔三成  
 浅野弾正少弼長政増田右衛尉長盛長東大藏大輔正家并片桐  
 東市正同主膳正大野修理大夫相談(は)世界を暫く隠密(し)  
 ならんと(志)して(は)死體を金具時繪の法箱小納め奉り(る)然(と)  
 ひと(も)は(死)界(世)小(隱)ま(き)子(依)て(收)長(月)の(上)旬(都)の(末)小(當)り  
 阿弥陀(が)峰(小)淨(箱)を(納)まり(け)る

秀元金吾黄門秀詮公(は)仕(奉)る(は)改(所)極(法)便(と)て  
 参(り)し(時)ゆ(く)と(は)返(す)を(待)たる(同)小(カ)ウ(ソ)ウ(ス)小(出)合(回)方  
 山の物語の序小秀元(は)る(大)名(高)家(の)身(の)上(小)人(一)



より除くしき事をもと取りまして大君伊世の時  
 奇異あるは事おほしきと尋ねばカウゾウス答てけり  
 ふうりあるは折神いざぶが折の壺の比まどろまを  
 て六沙目覚早ぶと記し奉るべし又人も来る能く  
 る只一人内座敷へ入内よりうらぐをうけひて  
 まつある小陰里ふ久しく沙目覚ざる折柄其丹を  
 て障子小少き穴をあけて潜小見せぬ十  
 内座敷一はい小大さくぬらせ給ふ伊世  
 時の時おほしき大よふ成らる給ひし内  
 乃毛もろろけりありは墓角老の少人  
 体にて無りりりとぞ

治りまけふ

十月一日の末明より清廟の地形を  
 廊下殿三門等馬屋ふまて清造宮を  
 木の檜石焼籠以下までも悉く慶長四年  
 乙亥三月中旬小出来  
 を四月十八日清宮移り  
 寄合て清代の鏡の明る級小心に任  
 云夏偏小は重恩小非やせ免て躍を  
 まる一と一同して金銀  
 むの小金沙羅金羅紗猩々緋金襴綾錦  
 線草鞋を他り面はき足小は花桶花  
 龍辰象虎麒麟唐獅



子孔雀鳳凰或大小の禽獸大魚等けらふ玉まで松の作地道とら  
らば寶前よ躍る拍子小吉野松の散ら如し十二頭の駿小八白  
綾白羽二重をひて十二幅の折掛十六幅の白母衣十二幅の吹貫或  
ハ金襴緋純子よて大旗を立一手と小押立貝鐘太鼓面鼓洛中を  
ひかへて系大明神の宮中御門外ハ云々及ば洛中ハ皆金銀の  
砂をまひりき異國の事ハいざあはれ日本に於て用關より以  
來極少き事なりけり

右此書を見よハ始終只大河内氏軍功と奉るふ如て日暮  
のまに其書とあくよりあし言をま付ゆり云々云々  
然と云共其隠さるるを探る小凡さるるもの自媒して婦女

の行をあそびめくや禹と名孟殿と称さる事と希一上六  
殿下の威武を顯し将卒の忠義と奉下ふ々後裔を屬さ  
さんと歌まらる然も此書の中ハ大道妙用あり正謀あり  
奇計あり豈さるもの明鏡後戒ありさるる夏と清んや  
文辭小三史春秋奇筆あり和歌小源氏三代の佳作ありそ  
の徳實を拾はばいづらんぞ文辭の盛るさるるを笑ん謀業を  
摘バ何ぞ言句の奇あさるる事を清らん後覽の君子其  
辭句の賤さるるを以志氣らさるるのまに其場々の日記小隨  
て号を校し号を正し能ひ敵の末の業ありとも何んを有  
き無と一母を有とせんや此上於て日本國中大小の神祇



殊小八氏神八幡三所小哲言て一言の詐偽あきつて成頭八次  
その也

清和天皇

貞純親王

六孫親王

鎮守府將軍滿仲

鎮守府將軍賴光

讚岐守右馬頭賴國

左衛門尉

參河守賴綱

兵庫頭仲正

大祖從三位兵庫頭賴政

伊豆守仲綱

右衛門尉有綱

大河内元祖伊豫守秀綱

大監物允仲詮

左近將監政忠

越前守義政

右京大夫政茂

判官出雲守賴定

左衛門督光政

左馬頭政國

惡將監左近將監季政

出雲守政詮

兵庫頭政親

伊賀守孝盛

左衛門尉政長

善室門尉出雲守基孝

善室善兵衛尉政綱

大河内友大膳大夫入道成也齋

寛文二年壬寅八月吉日

從五位下諸大夫源秀元



右相傳之所

同造酒允秀連

右此の卷者翁父高麗國へ渡海せし時の日記を集めて以て朝鮮物語



と号く自筆の判形を以て予に相傳の如きり然るに八幅山下傳譽上人より是を望ましく父の菩提所を乞はる幸と是を納むる者也

大河内造酒允

寛文十二<sup>壬子</sup>天正月吉日

秀連



正福寺傳譽上人願阿知郭大和尚

史官瘞久矣古英傑百戰之功壽軍之方不若其一敵終史者不降不由裨官十丈不其書多成打仔者焉此極者多矣其以笑難立保俾他世聞定不惟大氣解物也内者之在菊山時所撰也下取註若身就堂之其西也其時出於同習仗百年之下涼然比之裨官史官皆恃者也八月寅二月十二日夜漫談書其俗時步訪末葉相十數の言不朝鮮物語卷之下 大尾

糸魚川藩

佐治信



嘉永二年己酉五月刻成

東都書林

和泉屋善兵衛

本町三丁目



